

江戸に学ぶ

サステナブルな都市のあり方

脇坂敦史 構成
栗林成城 撮影

経済活動の中心を担い発展を遂げた近代都市。ところが、その行き過ぎた消費経済が、気候変動や生態系の変容などの深刻な問題を引き起こしている。今、その消費活動の背景にある人間の行動様式そのものを根本的に見直す必要があるのではないだろうか。現代社会に転用可能な江戸時代の循環型生活スタイルを提唱するアズビー・ブラウン氏と、経済発展により格差が進んだ江戸社会における思想を研究する板東洋介氏に、サステナブルな都市を実現させるためのヒントを、多角的な視点で語っていただいた。

江戸時代のシンボルである江戸城の跡地周辺は、千鳥ヶ淵公園などに整備され、現在でも、水と緑のある豊かな自然と都市との共生を見ることができる。

対談

「金沢工業大学シニアアドバイザー」

アズビー・ブラウン

Azby Brown

板東洋介

Bando Yosuke

「皇學館大学准教授」



江戸時代の循環型生活の基層について

板東 アズビー・ブラウンさんが「サステナブルな生活」という視点で江戸時代の生活を解説された『江戸に学ぶエコ生活術』という本を読ませていただき、大変感動いたしました。

たとえば古い民家の形というのは、日本人の考えと生活の反映です。私自身は江戸時代の思想を専門に研究しておりますが、書かれた資料のなかには、それがなかなか現れてこない。当時は中国で書かれた儒教、とりわけ朱子学や陽明学の文献を解釈するという営みが思想の中心でしたが、果たしてそれは多くの日本人が働いて生きて死んでいく、その生活過程と本当に絡み合ったものであったのか？そこにはかなり疑問があります。

江戸時代の国学者も、そのような考えから儒学を批判し、『古事記』や『万葉集』といった日本の古典に向かいました。明治以降の日本でも、輸入した西洋の思想が大衆の生活とつながることはなかった。この本に描かれた生活の細部にわたる美しいイラストを見ている方が、荻生徂徠の『論語徴』を読むよりも、ダイレクトに日本人の考え方が伝わってくるのではないかと思ったのです。ブラウン 大変光栄です。今の日本人は儒教、特に朱子学については何も知りません。でも、私が初めて日本に来たとき強い印象を受けたのは、日本人の生活と価値観に深く染みついた、たとえば先輩と後輩というような考え方です。西洋でいえば、多くの一般常識や諺が『聖書』に基づいているのと似ています。ですから私は、江戸時代にあったような循環型の生活の基層にも、儒教や神道、そして仏教的な価値観があったと感じている

のです。

板東 そうですね。ただ日本の場合、はじめに思想があつてそれを典拠として道徳ができていくといえるのか、微妙なところがあります。農民が共同で農作業するとか、武士が合戦をするといったプラクティスが先にあり、それを表現するとき禅や儒教の言葉を借りてみた、といったことも多かったのではないかと。

ブラウン 確かにそれは、どちらが先か分からない（笑）。

板東 とりわけ江戸時代に経験に基づくプラクティスと思想がずれていると感じる理由は、武家政権の性質そのものにもあると思います。同時期の中国や李氏朝鮮では政策決定の基準が儒教にあった。一方、江戸幕府の正当性はつまるところ徳川家康が戦で勝ったことによるのであつて、きわめて現場主義的かつ現実主義的な政権運営ができたのだと思います。

ブラウン 江戸時代初期に建築用の材木が不足し、多くの山が丸裸になったことがありましたよね。深刻な土壌浸食や洪水も起きた。そこで「留山」という、伐採や立ち入りを禁じるような素晴らしい仕組みができた。もちろん、刃物をもって山に入るだけで死刑といった極端な部分もあります。しかし、その成立や運用を見ていると、幕府が厳しい法律で全国を無理やり従わせるといふ形ではなく、もう少しやわらかく基本的な考えをまとめ、それぞれの地域に合った問題の解決をうながすような独特のやり方があつたように思うのです。

板東 明治以降と違い、中間団体の自律性を最大限に認める形で、トラブルが起きたときは内部で解決させ、その報告を上にするという形をとっていたということですね。江戸初期の陽明学者で

江戸時代における自然観と労働観

ある熊沢蕃山という人も、岡山藩で新田の開発よりも後背地としての山や川の重要性を説き、植林することが急務だと主張した人でしたが、そこでも同じようなシステムが働いていたと思います。

ブラウン 江戸の思想家たちが自然について、どのような考えをもっていたのか興味があります。私の本はもともと英語で書いたものですが、ヨーロッパ言語の文脈では「自然を守る」という表現に違和感はないんです。けれども日本語では、どうでしょうか。たとえば江戸時代に「自然を守る」という概念はあつたのでしょうか？

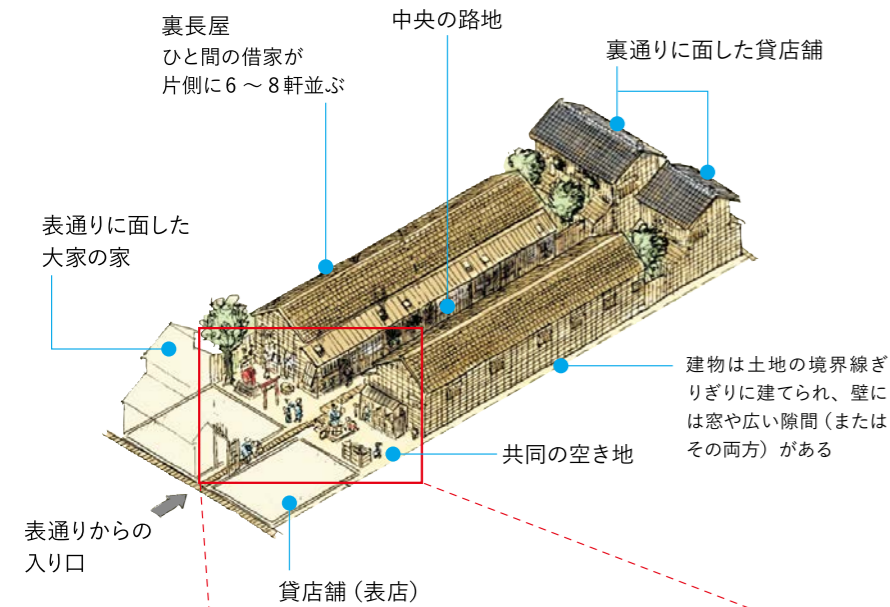
板東 自然に近い言葉といえば、天地、森羅万象あるいは山川草木でしょうか。ただ、保護しなければならぬほど、人間と自然が対立しているという発想はなかったと思います。だからこそ、かつて過剰伐採につながることもあつたかもしれないが、自然のなかに包まれて人為があるのが当たり前で、人間が自然を破壊できるなどとは思わなかったのではないのでしょうか。

一方で、自然に従っているのが人間の正しいあり方なのであるという強制力は強かったと思います。それは、自然を統制したり使役したりするよりも、四季のリズムに従い、環境に調和した生活を送るような方がすものです。いわば、鳥がなき、川が流れるように人もあらなければならぬのであると考えた。

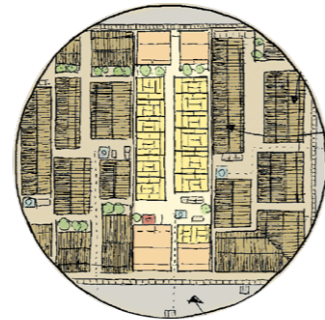
ブラウン 「自然を守る」という概念がなくても、ひじょうにうまく自然を守ることができたわけですね。ときどき、江戸の人が産業革命につながるような機械をつくらなかったのは、もしかしたら

●江戸時代の町屋敷

ブラウン氏著書『江戸に学ぶエコ生活術』では、当時の町に暮らす人々の様子もイラスト入り(書内ではモノクロで掲載)で詳細に伝えられている。農村とは異なる限られた空間のなかで、住環境だけでなく人々のコミュニケーションの場までさまざまなサステナブルな工夫がなされている。



江戸町の構成と町屋敷の仕組み



町人地区は「町割」と呼ばれる区画方式に基づき設計されている。1区画をひとりの地主が所有し、共同設備や広場などの管理も行う。



稲荷
稲荷が設けられていることも多い

入り口の木戸
防犯用の鋭く削った竹(忍び返し)がつけられている

共同便所
排泄物は仲介業者により買い取られ、下肥専用の運搬システムで運ばれた後、田畑の肥料に使われる

ゴミ捨て場
リサイクル品も置かれ、住民は自由に利用できる

どぶ(排水溝)
木の板や角材で覆われていて簡単に取り外せるようになっている。町ごとに専門の請け負いがどぶさらいを行う

井戸
共同の洗い場は水の節約とともに、情報交換の場にもなっている

儒教の価値観でそれが怠け者のすることを意味したからではないか、とも思うんです。

板東 仕方なくやるような義務ではなく、労働も「誠」であってナチュラルな営みなのであるという考え方は強かった。マルクスのユートピアは「労働のない世界」かもしれませんが、それはアジア人の夢ではありませんね(笑)。

ブラウン でも江戸時代には、意外と暇な人が多かったみたいですね。武士なども仕事は週に半分くらい。あとは庭いじりしたり、趣味に没頭したり。あるとき加賀藩で食料が不足して、武士も自分の魚を釣らないとだめだということになったらしいんです。もちろん武士だから、商売ではなく趣味でやる。羽毛や金箔、漆まで使った豪華な工芸品のような加賀毛針がそこから生まれた。

板東 今もそうですが、日本人には、生活を苦しくしている構造的な問題を考えてそれを改善するという方はいかず、生活や趣味のなかにちよっとした慰めを見いだすという習性があるのかもしれないね。

美意識の背景にあるもの

ブラウン こういう日本人の生活と深く結びついた美意識の背後には、何があるとお考えですか？

板東 私は禅の影響が強いのかと思います。仏教の修行というのは身体でやるものですから、どうしても修行は生活になる。掃除する、ご飯をつくる、瞑想する。特に道元禪師以降、日本の禅宗は修行それ自体が悟りなのであるという考えが強くなってきました。

室町時代以降、武家を中心に禅の思想が広まりましたが、その端的な表れが茶道でしょう。当

長屋的なものと現代

ブラウン 今の日本でも少し想像力を働かせると江戸時代の面影を感じることは、少なくありません。東京の小さな路地などに入ると、住人が緑を大切に育て、ちょっとした隙間にも植物を育てているのを見ることが出来ます。あるいは、狭い長屋の生活スタイルも、なんとなく想像できる。私

り前の日常生活それ自体が目的・価値なのであって、生活は何かの手段ではないという美意識。だから、たとえば畳の縁を踏まないとか、敷居はまたぐとか、きちっと生活すること自体が「生の目的」になりうる。

禅の修行は常任坐臥すべてが修行ですが、特に大事なのは料理です。今の家庭料理はどう手を抜くかがポイントですが、すべてに手を抜かない。火の通りにくい野菜は最初に煮ておき、タイミンをずらして炊き合わせる。だから、ちっとも省エネじゃないですね(笑)。でも、いわゆる「丁寧な暮らし」というのもそのロジックです。美しい生活それ自体が人生の目的であるというのには、おそらく日本人はいまだに根強くもっているんじゃないかと思っています。

ブラウン 仕事のすべてが一種の修行だという感覚は、たとえば宮大工のような職人たちの気質から感じることがあります。ここまでやるのか、と驚くほど細部にまで注意を払い、それが使う人やモノそれ自体への尊敬にもつながっている。アメリカのシェーカー教徒がつくった家具などにも言えることですが、背景に似た考えのあるところでは、無駄をそぎ落とした、ミニマリストックで美しいデザインが生まれるのかもしれないね。

が住んでいる横浜でも、ごく最近まで近所はみない顔見知りです。挨拶を交わし、朝になるとゴミ捨て場で「井戸端会議」が行われていました。今はプライバシーが重視されますが、全体としてはそれでコミュニティが損をされている。これから大きな挑戦になると思うのは、どうやってプライバシーを守りながらも交流できるような場をつくるか。ある意味、それは都市計画の問題です。

板東 ひとつは儒教の影響もあると思うんですが、江戸幕府は擬制の親子関係を奨励していたんですね。長屋の大家と店子は親子同然。また、店子同士は兄弟だから相互扶助せよ、という話です。

さらに長屋にはもうひとつの形成要因があって、それは単純に支え合わないと生きていけない、という身も蓋もない理由です。今は東京でもシェアハウスが増えています。今も東京でもシェアハウスが増えているように感じます。長屋の大きな機能として、たとえば育児の外注というか分担があります。今よその子を預かっているし、うちもそのうちお願いするから、という形で身を寄せ合って生きていく。これは日本でもあと10年、20年後に主流化する可能性がある。

ブラウン シェアハウスには私も注目しています。自分の部屋というプライバシーもあり、台所やダイニングのような共同空間もある。今のシェアハウスは20代、30代の若い個人が中心ですが、やがて子育てを助け合うような家族単位の「ネオ長屋」のようなものも、できるかもしれない。

板東 確かに、空間デザインの問題は大きいですね。

ブラウン ご存じのように、かつて屋敷に門を構えられたのは武士だけでした。明治時代になると、それに憧れてみんなが門をつくった。ただ江戸時

代の生活を調べていて思うのは、長屋暮らしでもお互いの関係のあり方で、プライバシーを守ることとはできる。無視する、見ないふりをするとかね。今でも、電車に乗るときにはみんなやってる。お裾分けのような文化も、貨幣経済やお米の経済とならぶ、ひとつの経済システムでしょう。今も田舎の方にいけば、そういう「循環型経済」が、ちゃんと続いている。

板東 落語などでよく長屋の「味噌、醤油は借りてくるもの」みたいな感覚が描かれますね。私も昨年から三重で暮らしているのですが、(近所の方から)旬の野菜や魚をたくさんいただくので、あまりスーパーマーケットに行く必要がないくらいです。私は学者ですから何もあげるものがなく、白菜のお返しに論文の抜き刷りをお渡しするくらいですが(笑)。

ブラウン 知識のお裾分けですね(笑)。

学ぶことそれ自体が楽しい

ブラウン 江戸時代の身分制度はもちろん厳しいものでしたが、武士も歌舞伎を見にいたり、町人も武士と一緒に詩を書いたり勉強したり、結構羨ましいと思うことも多いですね。何よりも、江戸時代の識字率の高さには目をみはるものがあります。

板東 近世日本の学習熱というのは大変なものだったわけですが、今の研究者がよく分からないのは、なぜみんなそれほど学問が好きだったのかということ。他の儒教国は勉強したら科挙に合格して役人になれますから、明確な動機がある。でも日本には科挙がないし、職業は世襲です。にもかかわらず余暇で学んだ。なぜそれほど熱心に学

びました。立身出世とか、学歴、偏差値という形で学ぶことに実用的な目的ができる、どうしても面白くなってしまふ。

ブラウン 知識のための勉強、自分を磨くための勉強というのは素晴らしいですね。私も日本の大学で教えているけれど、学生たちはかなり合理的に考えている。「大学に来る理由は、仕事を見つけてやることではない」と話すのですが、残念ながら就職率の向上を目指している大学側の考えは違ふところにあるようです。勉強のための勉強というのは今、贅沢なのかなあ？

長期的な視点をもつ

ブラウン 江戸時代の人は考えている時間のスパンが長かったなあ、と強く感じます。林業で木を育てることもそうだし、大工がつくるものも数百年単位で見ている。今はそういうスパンでものを考えることができない。その暇がないし、短期的な利益を考えて行動しなければならぬ。とても残念なことです。

板東 近世における社会デザインの基本は、いわば選択可能性を減らすこと。生まれたところで生きて死ぬしかない。「いやだったら出て行く」わけにいかないから、逆にいうと、生まれ落ちた共同体に対してちょっとくらい自分が貢献しすぎてその見返りがなかったとしても、世代を重ねればいつかは戻ってくるんだと考えられる。たぶんそれが相互扶助の基本にあつたと思います。一種のゲーム理論といえなくもありませんね。一回の人生なら相手を騙して得をした方がいいかもしれない。でも何代も世代が交代し繰り返しますので、結局のところ一番よい戦略は利他的であることになる。



「江戸は諸国の掃き溜め」と称したのは荻生徂徠。現代の東京をはじめとした都市のあり方を見直すためにも、ブラウン氏や板東氏など分野を超えた識者が交わる「場」をつくることも重要だ。

んだのか？ 思想史学者である前田勉先生の『江戸の読書会』という著書があるのですが、その結論は「楽しかったから」というんです(笑)。
ブラウン 武士がより重要な役割につくための試験などがあつたことはないのでしょうか？

板東 江戸時代を通し、家柄主義と能力主義の対立はありました。19世紀に入る頃から各地で藩校がつくられ、藩校の成績が藩の役職につながるというルートもでてきました。けれども、最後まで

ブラウン 「結」のような共同作業であるとか、お金の貸し借りを含んだ組合のような仕組みも、それがあつたから成り立っていたんでしょうね。長く続けば続くほど、システムは安定するし、誰もが信用するでしょう。

板東 「いやだったら抜けられる」という人間関係に変容したら、この社会はもたないと荻生徂徠や太宰春台は考えました。だから、民を地に落ち着けてよそに行けないようにしなければいけない。都市と地方の格差が広がる現代にも通じる問題意識だと思いますが、これを今そのまま主張することは難しいでしょうね。

ブラウン 今は選択肢が多すぎて、それが問題になってる。なんでも自由ですが、そのなかで自分に一番合っているものを見つけてるのは大変なこと。だからこそ何かを目的としない、それ自体のための勉強や旅、モノづくりといったものが大切になってくる。何を大切にしたいか、を真剣に考えたら、ある意味でみんな同じ結論になるんじゃないでしょうか。自分、そして家族を大事にする、国を大事にする。そして、環境を大事にする。

それにしても、今回いろいろ教えていただいた江戸時代の文献は、まだ200年くらいしかたっていないのに、くずし字や漢文で書いてあるため、ほとんどの日本人は読むことができません。一部の専門家だけしか読めない特殊なものになってしまっているのが残念でなりません。400年以上も前に書かれたシェイクスピアの作品でさえ、英語圏の人間は努力すればなんとか読むことができるのに……。

板東 よく日本文学研究の方も、くずし字と漢文のリテラシーがないからシェイクスピアと同時代の文献が日本ではまったく読めないとい嘆いておら

能力主義が一般化することはなかったと思います。学問の場には、身分の差というものがない。『江戸の読書会』でいう会読(かいどく)というのは今でいうゼミナールですが、そこには読書量と年功(何年そこにいるか)の序列しかありませんから、たとえば下級武士の息子が家老の息子に対してお前の経典解釈はおかしいと言っても構わない。だから楽しい、というのもあつたのでしょね。ところが明治以降は、学が「役に立つもの」になってし

れます。

ブラウン 文学、建築、思想……あらゆる分野で同じことが言えると思うのですが、これからの日本は、西洋と日本の両方を知らなくては十分ではないと感じます。もちろん、ひとつのことを専門的に学ぶだけでも大変ですから、勉強する時間がなかかもしれない。でもプラスアルファとして知ることが大切ですし、その意味は重いでしょう。今日のお話を伺いながら、それをより強く感じました。



アズビー・ブラウン

あずびー・ぶらうん
金沢工業大学産学連携室シニアアドバイザー。1956年生まれ。イェール大学で日本建築を研究後来日し、東京大学大学院工学部建築学科修士課程を修了。金沢工業大学未来デザイン研究所所長を経て、現在は同大学シニアアドバイザーとして活動するほか、MITなど内外の機関にて幅広く活躍。著書『The Genius of Japanese Carpentry』『江戸の学』『エコ生活術』など。



板東洋介

ばんどう・ようすけ
皇學館大学文学部神道学科学准教授。1984年生まれ。東京大学文学部思想文化学科、同大学人文社会学系研究科基礎文化研究専攻倫理学専門分野修士課程を修了。日本学術振興会特別研究員PDを経て現職。専攻は日本倫理思想史。2010年日本倫理学会和辻賞受賞。共著に『自然と人為——「自然」観の変容(岩波講座日本思想第四巻)』など。